

博士学位請求論文概要書

A Study in the Paratext of the Seventeenth Century Religious Poetry

(17世紀宗教詩のパラテキストに関する一考察)

渡辺賢一郎

1. 本論文の目的と研究対象

本論文は、17世紀イギリスの宗教詩人の著作を、パラテキストに注目して分析したものである。主な研究対象は George Herbert の *The Temple* および John Milton の *Paradise Lost* である。パラテキストが、どのようにこれらの作品に対する理解に影響を与えたかを中心に検証した。これらの作品の複数のバージョンを、書物としての作りに注目して分析し、どのようなパラテキストが用いられているかを検証し、その本がどのように、どのような読者に向けて提供されているかを考察した。

The Temple および Milton の *Paradise Lost* を主に取り上げるのは、17-18世紀にかけて人気が高く、多くの版を重ねたからという理由だけではない。それらは版を重ねていながら、書物としても変容していったからである。その過程において、とりわけ大きく変化したのが、パラテキストであった。この2作品には、挿絵やインデックスが付けられ、また注釈が付けられることさえあった。そのうえ、*Paradise Lost* に関しては、テキストそのものを書き換えるものさえいた。このような本文の書き換えは少なかったとはいえ、多くのパラテキストの付加により、本文の特定の箇所が強調されるなどし、実質的に読者の理解は異なるものになったのである。

また、Herbert と Milton に加え、当時人気の高かった Francis Quarles と George Wither についても、聖書に基づく作品を取り上げ、同様にパラテキストの点から考察した。注目するのはパラテキストではあるが、同時に、D. F. McKenzie の唱えるテキストの伝達、また McKenzie のおそらく影響下にある T. E. Birrell の唱える文学作品のプレゼ

ンテーションの側面、あるいは Peter Shillingsburg の言葉を用いるなら、script act としての側面から、文学作品を考察した。

2. 背景——17世紀イギリスで用いられたパラテキスト

17世紀イギリス文学を研究する上で、パラテキストに注目することは特に重要である。なぜなら作家をはじめ、印刷者もパラテキストの使用に関して非常に関心が高かったからである。Richard W. F. Kroll が述べているように、ルネサンス初期のプラトニックな作品理解に対して、17世紀イギリスでは、物質主義的な理解が支配的になってきた。かつては、商業的な施設である印刷所や劇場などは芸術を汚すものであると軽蔑する傾向があったが、それが17世紀になると薄れてきたというのである。それにともない、モノとしての本をそれ自体として以前よりも重視するようになり、パラテキストも重視されるようになったのである。

3. 構成

本論は以下のような構成になっている。

Part I Introduction	9
Chapter 1 From New Bibliography to Sociology of Text	10
Part II George Herbert's <i>The Temple</i> and its paratext	28
Chapter 2 Titles of George Herbert's Poems	29
Chapter 3 "Chop'd and minc'd": Philemon Stephens' "table of places"	48
Chapter 4 From Memory Theatre to Illustration	77

Part III King James Version as a Great Bibliographical Code	98
Chapter 5 Paratextual and Material Changes to the King James Version	99
Chapter 6 Use of Paratext in the Biblical Works of Quarles and Wither	120
Part IV	Some Versions of Milton's <i>Paradise Lost</i> 147
Chapter 7 Patrick Hume's Annotations to Milton's <i>Paradise Lost</i>	148
Chapter 8 <i>Paradise Lost</i> in Rhyme	176
Chapter 9 <i>Paradise Lost</i> as a Popular Classic Work	191
V	Conclusion 205
Chapter 10 Conclusion	206
VI	Appendix 208
Chapter 11 Appendix I: items with "how", "How", "what", "What" and "Rules"	209
VII	Bibliography 216

パート I は全体の序論として理論的な前提を述べ、いかにパラテキストが重要であるかを考察した。

第 1 章

パラテキストについて注目すべきことのひとつは、それが読者のテキスト理解を方向付ける点にある。作者あるいはテキストを出版する過程に参加した者たち（たとえば、出版者や印刷者など）が、パラテキストを用いて、彼らから見て正しい理解の方向へ読者を誘導することができるのだ。たとえば典型的なのは序文である。そこに作成者達の意図が明示的に書かれていれば、それは強力に読者の理解を方向付ける。したがって、特定のバー

ジョンのテキストに見られるパラテキストを分析することで、そのバージョンがどのように理解されたか、またはどのような読者に向けてそのバージョンが意図されていたか、を理解することができる。

本章では、パラテキストを分析するにあたり、理論的な前提を考察し整理した。まず作者の意図を究極の目的とする New Bibliography の限界について、W. W. Greg の議論を参照しつつ指摘した。続いて、New Bibliography に対する批判として台頭してきた、新しい書誌学の潮流を代表する Jerome J. McGann、D. F. McKenzie、Peter L. Shillingsburg らの議論を検証した。McGann らの試みは確かに新しいが、実際の文学作品分析に用いることは難しい。まだ方法論として定まっていないからである。たとえば、ひとつの例として、パラテキストの重要な構成要素であるタイポグラフィの研究方法については、McKenzie 自身がいうように「意味を媒介するものとしてのタイポグラフィの作法の歴史はまだ書かれていない」(34) のである。また、従来からの書誌学の術語と、McGann らの、新しい書誌学の用語は、整理が行き届いていないため、混乱を招きかねない。

したがって、この論文では、Gérard Genette による *Paratexts: Thresholds of Interpretation* (1997) の議論を基礎にした。ただし、すでに Massai らに批判されるように、Genette のパラテキスト概念は作者を素朴に前提している。本論ではこの点を批判的に吟味し修正を加え、この論文で取り上げるパラテキストがどのようなものであるか、分類しつつ述べた。

Part II は、George Herbert のパラテキストを、タイトルについて（第2章）、インデックスについて（第3章）、挿絵について（第4章）、各章で分析した。

第2章

この章は、Herbert の *The Temple* に収録された詩のタイトルを分析し、この詩の同時代の読者にとり、タイトルがどのような意味を持ったかを考察した。Anne Ferry と Mathias Bauer が、すでに Herbert のタイトルに着目し、分析を行い、同時代のコンプレックスブックに用いられた見出し語との親近性を指摘している。例えば Ferry は、*The Temple* 収録の詩のタイトルと、*Bel-vedere Or The Garden of the Mvses* の見出し語を比較し、26 の同一の語を見出している。しかし、両者ともそれ以上に *The Temple* のタイトルとコンプレックスブックの見出し語の間に深い関係を見ていない。また、Ferry が指摘した以上に、*The Temple* とコンプレックスの間には類似点があるのではないか、との疑問が残る。

本論では、上記のようなこれまでの研究から取りこぼされてきた点を補うため、さらに広く Herbert の同時代のコンプレックスを検証した。特に本章では、Thomas Farnaby（レトリックの教科書の中にコンプレックスの見出し語の一覧を載せた）、John Foxe（見出しのみ印刷されたコンプレックスブックを出版した）と John Marbeck（聖書のコンコードを作成し、その中でコンプレックスの見出し語を使用した）の著作を分析した。その結果、彼らの著作に見られたコンプレックスとして用いられている語句と、*The*

*Temple*のタイトルの間に、これまで看過されていた類似を発見した。このことから、Herbertの詩集とコモンプレイス文化というものの親近性を指摘し、そのことが当時の読者にHerbertの詩が広く受容される一因となったのではないかと、結論づけた。

第3章

本章は、ロンドンの出版業者である Philemon Stephens によって *The Temple* の第7版から付加された the table of places について考察した。それまでのケンブリッジから、1656年にロンドンに出版地を変えて、*The Temple* は、35ページにわたる詳細な索引が付くようになる。のちに *The Temple* には、Christopher Harvey の *The Synagogue, or, The Shadow of The Temple, Sacred Poems and Private Ejaculations. In imitation of Mr. George Herbert.* および Izaak Walton の *Life of George Herbert* が付加されることになり、こちらのほうがこれまでの研究では多く取り上げられてきた。しかし、それに劣らず、この Philemon Stephens により付加された the table of places は重要である。そこで本章では、ロンドンで出版された *The Temple* の、特に table of places を取り上げる。またもうひとつ注目するのが、タイトルページのレイアウトである。ここで用いられているタイトルおよびサブタイトルを構成する文字のサイズが、各バージョンにおける作成者の強調したい点を端的に示していると考えられるからである。以上を考察することで、ロンドンバージョンの *The Temple* がいかに、Stephens が求めた Herbert 像を現すものとなっているかを指摘した。

第4章

本章は、Herbertの詩のうち、教会の建物の一部を直接指し示す詩を取り上げた。

Heinrich Plettは、Herbertのこのような詩が、記憶術と密接な関係にあると指摘している。これはLouis Martzの指摘するイグナチウス ロヨラに由来する瞑想との親近性よりも説得力がある。なぜなら、Herbertの詩は、ロヨラの瞑想の要求するような詳細な一貫性のある場所の描写ではなく、むしろ簡潔で、また鮮明なイメージを伴うからである。この後者のような特性を記憶術では用いるのだ。しかし、Plettは言語的な特性にのみ注目し、それ以外の側面——たとえばイメージなど——を考察していない。ところがまさにこの時期、印刷術の発展に伴い、記憶術的な詩が変容を迫られていた。この章は、まずHerbertと記憶術についておそらくそれがF. Baconに由来することを指摘した。その上で、はじめは記憶術との親近性を持っていたHerbertの教会の場所を示す詩が、印刷術の発展およびパラテキストの変化とともに、変容したことを指摘した。さらに、それに伴い、記憶術としての詩がどのように抑圧されていったかを示した。Herbertの詩の中で、特に注目したのが、“Superliminare”と“The Altar”である。この二つの詩は著しく変化し、最終的に挿絵に近くなるのである。このようにして、最初は記憶術との親近性を持っていた詩集が大きく変化し、挿絵入りの詩集となったのだ。

Part III は、欽定訳聖書の変化をパラテキストに注目し分類し（第5章）、およびそのパラテキストを援用した二人の詩人 Francis Quarles と George Wither の著作について考察した（第6章）。

第5章

本章は、欽定訳聖書の書物としての変容を取り上げた。この本ほどさまざまに変容した本も少ない。フォーマットが変化し、挿絵や注釈が加わり、また内容の一部が抜粋されて出版されたものも多かった。重要なのは、欽定訳聖書が、Herbert や Milton をはじめとする宗教詩人の本の作りにも影響を与えていることである。つまり、欽定訳聖書は、パラテキストのパラダイムを提供しているのである。このことを考察するために、本章は、欽定訳聖書の複数のバージョンを、主に Ian Green の著作を参照しつつ検討した。そして、いかに欽定訳聖書のパラテキストが宗教詩人の著作のパラテキストとして用いられているかを考察するための見取り図を提供した。

第6章

第6章は、聖書に基づくパラテキストがいかに宗教詩人の著作で用いられているかを検討するために、二人の宗教詩人、George Wither と Francis Quarles の著作を詳しく分析した。特に注目したのが聖書の文言のパラフレーズである。聖書のパラテキストの中でもこのパラフレーズはもっとも広く詩人の間でも用いられていた。Christopher Hill がいう

ように、Quarlesはおそらくこの当時もっとも人気の高かった詩人のひとりであった。また Wither は、通常、靈感を受けた詩人として考えられることが多いが、実際はきわめて聖書の造詣が深く、パラテキストについても非常に詳しい詩人であった。そのため、本章ではこのふたりの作品を特に取り上げ、彼らがどのようにパラテキストを用いているかを考察した。特に Quarles に関しては、一連の聖書のパラフレーズの作品をとりあげ、それがいかに起源としては説教に由来する Use のようなパラテキストを用いているかを論じ、このパラテキストが宗教的な実践を示唆するものであることも示した。以上の考察に基づき、このふたりの宗教詩人が、同時にパラテキストに関しても極めて深い理解を持っていたことを示した。

Part IV は、John Milton の *Paradise Lost* について、その注釈（第 7 章）、押韻改作（第 8 章）、12 折本版（9 章）について各章で論じた。

第 7 章

本章は、*Paradise Lost* に付された Patcik Hume の Annotations を主題として取り上げる。Hume は、*Paradise Lost* をあたかも聖書および古典のように扱い、膨大な注釈をつけているが、その注釈から見えてくるものが何であるかを考察した。比較のために、Abraham Cowley の notes on his own work *Davidis* および John Dryden's notes on *Virgil's works* をとりあげた。例えば Cowley にとって、聖書の語句は、時に改変可能な

言葉でさえあったが、Hume にとっては、重要なのは Milton の言葉ではなく、聖書および古典のコモンプレイスであることを明らかにした。また、Hume は、新古典主義流の優劣比較の論理に基づいて Milton の語句を論じることで、Milton が本来持っていた急進的な側面を抑圧した。それにより、新古典主義の詩人 Milton を作り上げることに貢献していることを指摘した。

第8章

本章は、John Hopkins の *Milton's Paradise Lost Imitated in Rhyme* (1699) を取り上げた。 *A Milton Encyclopedia* にわずかに取り上げられてはいるものの、John Hopkins のこの著作は、ほとんど研究者から顧みられることがない。 *Paradise Lost* の Book IV, VI, and IX だけを短く寄せ集めた不完全な押韻改作とみなされてきたからである。しかし、 *Milton's Paradise Lost Imitated in Rhyme* を詳しく検討してみると、この作品は、興味深い性質を持っていることがわかる。まず、なぜ *Paradise Lost* の Book IV, VI, and IX、3巻だけが取り上げられたのか、詳しく分析する必要がある。また、Milton の *Paradise Lost* に “Adam and Eve” と書かれているところが、Hopkins の方では “Eve and Adam” と逆になっている。そのうえ Hopkins の方には、他の Hopkins 自身が創作した詩 “Bellona and Astraea” が収録されており、実はこの詩が *Paradise Lost* 押韻改作を理解する上での鍵となっているのである。このような点を詳細に分析することで、実際は、

Hume は、王政復古を果たしたオラニエ・ナッソウ家を賞賛する詩として Milton の *Paradise Lost* を領有したことを指摘した。

第9章

本章は、*Paradise Lost* の第9版を取り上げる。12折本のポケット版として出版された第9版は、本として興味深い。まず、第6版に付けられたインデックスに若干の改良を加えたものが付けられ、さらに、オランダから輸入した最新の活字が用いられている。

Jacob Tonson は、この本を、当時非常な人気を誇ったエルゼビアのポケット版古典をモデルに出版したのであった。書物文化としてみた場合に、このように興味深い版であるにも関わらず、これまであまり研究の対象とはならず、主な研究者は Elizabeth Bobo のみであった。そのため、この章ではこの第9版を取り上げ、この本の作りについて、Jost Hochuli のいう detail typography を参照し、詳細に吟味した。はじめにエルゼビアのポケット版とこの第9版の類似点を分析し、ついで、第6版から第9版へのインデックスの項目の変化をあとづけた。このことから、この第9版が Milton の *Paradise Lost* をポピュラーな古典として提示していることを示した。

Part V は全体としての結論を述べた。

第10章（結論）

この章は、結論として、全体の結論を要約的に述べた。17世紀の宗教詩人、とくに George Herbert と John Milton、また Francis Quarles や George Wither の著作は、主題が宗教的であるばかりではなく、書物の作り、とりわけパラテキストが宗教的である。その際に用いられたパラテキストは、当時のコモンプレイス文化や古典、特に欽定訳聖書に由来するものが多かった。とくに欽定訳聖書は、いわば great bibliographical code として、内容のみならずパラテキストに関して、また書物としての作りに関しても、宗教詩人の著作に大きな影響を与えたのである。これは、このような詩人の作品を理解する上で忘れてはならないことである。書誌学的な考察は文学テクストを理解する上で抹消的なものではなく、その一部を確かに形作るものなのだ。

参考文献

- Bauer, Matthias. "Herbert's Titles, Commonplace Books, and the Poetics of Use: A Response to Anne Ferry" *Connotations*, Vol. 4, no. 3, 1994/95, pp. 266-279.
- Birrell, T. A. "The Influence of Seventeenth-Century Publishers on the Presentation of English Literature." *Historical & Editorial Studies in Medieval & Early Modern English*. Eds. Mary-Jo Arn, Hanneke Wirtjes, and Hans Jansen. Wolters-Noordhoff, 1985, pp. 163–173.
- Bobo, Elizabeth. "Paradise Lost 'For the Pocket': The 1711 Index and the English Canon." *Discoveries* vol. 28, no. 1, 2011. Web. Accessed 3 July 2013.
- Ferry, Anne. "Titles in George Herbert's 'Little Book'". *English Literary Renaissance*, vol. 23, no. 2, 1993, pp. 314–344.
- Genette, Gérard. *Paratexts: Thresholds of Interpretation*. Cambridge UP, 1997.
- Green, I. M. *Print and Protestantism in Early Modern England*. Oxford University Press, 2000.
- Greg, Walter. W. "The Rationale of Copy-Text" *Studies in Bibliography* Vol. 3, 1950/1951, pp. 19-36.
- Hill, Christopher. *The English Bible and the Seventeenth-Century Revolution*. Penguin, 1994.
- Hochuli, Jost. *Detail in typography : Letters, Letterspacing, Words, Wordspacing, Lines, Linespacing*. Hyphen Press, 2008.
- Kroll, Richard W. F. *The Material Word: Literate Culture in the Restoration and Early Eighteenth Century*. Johns Hopkins UP, 1991.
- McGann, Jerome J. *A Critique of Modern Textual Criticism*. UP of Virginia, 1992.
- McKenzie, D. F. *Bibliography and the Sociology of Texts*. Cambridge UP, 1999.
- Martz, Louis Lohr. *The Poetry of Meditation: A Study in English Religious Literature of the Seventeenth Century*. Rev. ed., Yale UP, 1962.
- Plett, Heinrich F. "Ars Memorativa: Mnemonic Architecture and English Renaissance Literature." *Texte: Revue de Critique et de Theorie Litteraire*, vol. 8 / 9, 1989, pp. 147–58.

Shillingsburg, Peter L. *Scholarly Editing in the Computer Age: Theory and Practice*. 3rd ed., U of Michigan P, 1996.